Wilfred R. Bion 研究（Ⅱ）

――「原始心的マトリックス」から「体制乳房」へ――

祖父江　典人

Ⅰ　はじめに

先の稿（2003）“Bion（Ⅰ）”にて筆者は、精神分析の革命児、Wilfred Ruprecht Bionの生涯を俯瞰し、その人生が「不在の乳房」という視点を導入することによって、いかに意味深い相貌を立ち表すかを見てきた。すなわち、Bionはその生の始まりから、この世との懸隔を痛烈に体験するところから生れ落ち、その隔たりを埋めようとして、幼少時には質問癖や空想癖などの空想的思考を発展させたものの、なかなかにそのズレは埋まることがなかった。世界（乳房）とのこの断裂を、筆者は、Bionのこころの原風景と位置づけ、それをBionの後年の思考理論とも重ね合わせ、「不在の乳房」という概念に収斂させた。Bionの人生には「不在」や「空白」、「断裂」、「深淵」ということばに象徴されるような不幸なエピソードは、事欠かないのである。Bionは常に不在という脅威にさらされながら、成長していった。

Bionは、その「不在の乳房」の脅威に対抗し身を守るために、もう一方で防衛的な自我強化も図って行った。先に述べた質問癖や空想癖などもそうだが、長じるにつれもっと有効で強力な手段を手に入れる。それが筆者が「筋肉防衛」と名づけたところの男性性（masculinity）への同一化である。Bionは幸いなことに、運動能力や身体の頑健さへの天賦の才に恵まれ、水球やラグビーなどのスポーツにおいて図抜けた能力を発揮していく。それは首尾よく、Bionの内面の脆弱性を蔽い隠すに余りあり、第一次世界大戦での過酷な戦闘状況においても武勲を挙げるほどの「筋肉防衛」を形成していった。

こうしてBionの生涯は、精神分析家になるまでは、「不在の乳房」と「筋肉防衛」のいたちごっこのような応酬を続け、それがBionの人生における「ものそれ自体」のような具体的な生き残りのテーマとなっていたが、精神分析家に

なっていく過程で、「不在の乳房」は、次第に認識論的な思考のテーマへと変貌を遂げ、Bionの精神分析家としてのキャリアの中に止揚されていこうとした。

Bion（Ⅰ）にて筆者は、Bionが精神分析家になる前段階の軍人精神科医までに焦点を当て、人生上のテーマであった「不在の乳房」の問題が、思考化されていく萌芽的段階での業績を検討した。その業績の中においても、人生上における「不在の乳房」の問題は色濃く影を落としていた。たとえば戦争状況における原初的不安（不在の乳房）に立ち向かうには、兵士と市民とではいかにこころの装備が違うかという、防衛強化の側面を重視する観点から論を進めており、これはまさにBionの実人生における「筋肉防衛」を重視した生き様と軌を一にしている。しかし、この【前―精神分析期】における業績も、次第にこうした防衛強化の論調から、「未知なる情緒的要因」という「不在の乳房」の中身自体に足を踏み入れようとする姿勢を見せている。ただし、この時期は、内的不安を探求するだけの方法論をBionはまだ持ち合わせていなく、この先のBionの方向性を予兆させるところで、その業績は幕を閉じていた。

そして、今回論じようとするのが、Bionが格段に直観力を増す契機となったMelanie Kleinとの個人分析が始まって以降の時代、【精神分析第一期】における「不在の乳房」の問題である。この時期の業績は、『グループにおける経験 Experiences in Groups』（1961）に集約される。Bionは、タヴィストック・クリニックの専門委員会から要請を受け、1948年から精神分析的オリエンテーションでのグループ療法を開始した。そして、1948年から1951年までその研究成果は「人間関係Human Relations」誌に発表された。それが後の理論的考察「グループ・ダイナミクスGroup Dynamics」を合わせ、上記の一冊として出版された。

Bionがグループに精神分析的に関わった時期は、このように長くはないが、「『グループにおける経験』は、精神分析的グループ・サイコセラピーの中で、おそらくもっとも簡潔で、もっとも影響力のあるテクストである」（Pines,M.1985）と言わしめるほどに、グループ療法の世界に革新的影響をもたらした。いよいよBionの直観力に満ちた人間性への洞察力は、満を持して力を発揮し始めたのである。

さて、本題に入る前に、『グループにおける経験』が著されたBionの私的背景を見ておくことは、特に「不在の乳房」との関連を論じるうえで、無駄にはなるまい。なぜなら、この業績もBionの個人史といわく分かちがたい面があるからだ。

Ⅱ　『グループにおける経験』が著された背景

Bionの精神分析における業績も、グループに関する仕事から始まったのは、あながち偶然ではないかもしれない。というのは、Bionとグループとの関係には、因縁浅からぬものが感じられるからである。

まず、Bionの生育史を顧みると、そこにはグループ体験の明と暗のコントラストがくっきりと浮かび上がる。グループは、Bionに原初的不安と課題達成の充足感との両面をもたらした。すなわち、Bionが初めて集団生活を体験したのは、パブリック・スクールの小学校での寄宿舎生活である。Bion(Ⅰ)で論じたように、それは母国インドや家族からの別離という非情な「不在の乳房」体験となった。痛切な孤独感と周囲の子どもの無邪気な好奇の目に晒された剥き出しの体験は、母なるものの喪失に伴う原初的不安をよく伝えている(Bion,W.R.1982)。そして、もう一方では、Bionに課題達成の歓びを高いレベルで味あわせてくれたのも、グループ体験を通してであった。すなわち、Bionは水球やラグビーなどのグループ競技に頭角を表し、オックスフォード大学在籍中には、ラグビーの青章選手にまで登りつめている。そこでのグループ競技が、協同的な力の結集のもとでの高い達成感をBionに体験させたであろうことは、容易に察せられるところである。すなわち、Bionは自らグループ療法を始める前から、グループの不安と課題達成の両側面を、すでに個人的経験の中で体感していたであろうことを、ここでは押さえておきたい。なぜなら、Bionの『グループにおける経験』の主要コンセプトは、課題達成に向けてのワーク・グループと、原初的不安の表れとしての基底的想定という、まさにBion個人のグループ経験を色濃く反映しているような論理立てとなっているからである。

なかでも第一次世界大戦における軍隊での極限的なグループ経験（戦車隊で

の戦闘で、Bionと二人の同僚しか生還しえなかった）が、Bionのグループ研究に大きな影響を与えたであろうことは、幾人かの研究者がすでに触れているところである。たとえば、Sutherland,J.D.(1985）は、「第一次世界大戦での戦闘将校としての経験は、時に大変なストレス下に置かれたが、疑いもなく、彼の心理療法的理解と今では融合していた」と、Bionのグループ療法を論評する中で述べているし、Pines,M.（2003）はさらに踏み込み、「第一次世界大戦の経験から、Bionは前線での戦闘状況の恐怖に捉われたが、その経験を倦むことなく原初的心的過程の探求に引き寄せようとした」と、論及している。軍隊での戦闘体験は、まさにこころの原初の恐怖を彼に肌で感じさせたに相違ないし、その恐怖に満ち満ちた際の戦闘部隊が、後に彼が理論化した基底的想定における「闘争―逃避」グループそのものであったろうことは、想像に難くないところである。

このように『グループにおける経験』が執筆される背景には、Bionのきわめて個人的なグループ経験が、精神分析的グループ療法の研究に当たっても、陰に陽に影響を与えていたものと思われる。

もう一点見逃せないこととしては、第二次世界大戦中の1943年に妻Bettyを病にて亡くしていることである。Bléandonu,G.（1994）も言うように、この喪失は、幾度かの女性との苦い経験の中でも極めつけのものとなった。すなわち、スクール教師時代に生徒の母親から訴えられて離職する羽目になった経験、さらには外科のインターン時代における婚約者からのいきなりの破談通知、最後に妻の突然の死、である。乳房の端的な象徴としての、女性とのこのような断裂、不幸の連続の果てに、1948年からBionのグループ療法に関する成果は発表され始めている。すなわち、『グループにおける経験』の背後には、「不在の乳房」の影が見え隠れしているのである。

その上、さらに事情を複雑にしているのは、この間の1945年からBionは、Melanie Kleinとの教育分析に入っていることだ。すなわち、Bionは「不在の乳房」の体験の後に、Kleinという新たな「授乳乳房」との出会いを得ている。この出会いは、『グループにおける経験』に如実に影響を与えることとなった。それは本論の中で、後に詳しく検討されることになろう。ただここでは、先に

述べたBionの個人的なグループ経験とともに、女性との極めて私的な別離や出会いも、Bionのグループ療法の研究に背後から影響を及ぼしていた可能性を言及するに留めておきたい。

Ⅲ　『グループにおける経験』と「不在の乳房」

1)「不在の乳房」状況としてのグループ・ダイナミクス

Bionの『グループにおける経験』は、厳密に言うと3部構成から成っている。最初に、軍人精神科医時代の「治療におけるグループ内緊張」が予備考察として収められ、次に本題である「グループにおける経験」が掲上され、最後に再考察として「グループ・ダイナミクス」が載せられている。前一者は、すでに軍人精神科医時代の業績としてBion（Ⅰ）にて論及しているので、本論では、Bionの精神分析的集団療法の成果として、後二者の論文を扱うこととする。

なかでも「グループにおける経験」は、この書の中心を成しており、Bionが精神分析的グループ療法に開眼し、その基本的な着想がすべて込められている記念碑的な論文である。

これを読んでまず驚かされるのは、Bionのグループに対する観察眼の確かさ、である。さらに言えば、グループに対してばかりでなく、Bionはグループ内における自分自身の内的感覚にも忠実たらんとしている。Bionはグループ現象として現れてくるものを、グループ・テイカーgroup takerとしての役を負う自らの感覚も含め、ありのままに捉えようとする。「約束の時間になると、グループのメンバーが現れ始める。人々はしばらくの間、互いに話しをしているが、ある一定の人数に達すると、グループ全体が沈黙してしまう。しばらくの後、また漫然と会話が始まり、また沈黙が訪れる。グループの注意の焦点は、ある意味で私にあるのだということが、私には明らかになってくる。さらに進むと、私が何かすることを皆が期待しているのだと知って、私は自分が不安を感じていることに気づく」。この短い引用の中でも、Bionがグループ内において自然発生的に生起してくる現象を、ありのままに観察し、なおかつ自らの感覚体験まで交えてグループ現象を視野に収めようとしていることが理解される。この描写には、グループが「全体としてのグループ」（磯田、1991）と

して、ひとつの人格のごとく、本能的な動きを示す現象の一端が窺い知れるのではなかろうか。

さらに続く描写でBionは、何も与えようとしないように見える、Bionに対するグループの不満を解釈している。「グループは、私に何かましなことをしてくれるものと期待し、信じきっていたのに、それが当たっていないとわかって悲しくうち沈み、がっかりしていますね。グループは、自分たちの期待が正しく、私のふるまいがわざと人を怒らせ失望させるものだと確信しています。私がやる気になればもっと違った風にふるまうこともできるのに、意地悪からそんな風にふるまっているだけなんだと思っているようですね」。

このように、グループ・テイカーとしてのBionの態度も、グループに生起している現象やひそかなる不安を解釈することに徹しようとしており、グループに対してリーダーが保証や安心を与え、グループをよい雰囲気に導こうとするような支持的なグループ療法とは、截然と一線を画している。あくまでも、精神分析技法に忠実な解釈重視、なのである。

Sutherland,J.D.（1985）が挙げているエピソードが興味深い。戦後、タヴィストック・クリニック内でもBionの影響を受け、スタッフによるグループ療法が一見盛んになった時に、グループ療法を行っているある部屋の中から、たくさんの笑い声が聞こえてきたとのことである。その時Bionが言ったことばが、ある意味で彼のグループに対する考え方を端的に示している。「あれは、『よい』グループだ。私のとは違う」。

このように、確かな観察眼と、グループの不安や期待に耐えながらも、生起している事象やその背後で蠢くグループの不安を解釈する技法を道具にして、Bionは精神分析的グループ療法に着手した。Meltzer,D.(1978)は、このことを次のように纏め上げている。「最初に示されているのは、風聞と事実の観察との相違が、Bionの仕事に首尾一貫しているし、それは、創造的思考にとっての『選択された事実』の役割を強調することにつながろう。二番目に示されているのは、物事を違った角度から見る能力であり、それに付随するユーモアとともに、パラドックスや『驚くばかりの矛盾』へのぬかりのなさである」。つまり、Meltzerは、Bionは風聞ではない、この目で見て体感した事実というものを重視してい

るし、しかもその事実を捉える目も複眼の視点を持っているので、重要な事実を選択もするし、パラドックスにも耐えうるものなのだ、と言いたいのである。

さて、こうしてBionは精神分析的グループ療法という新たな領野に分け入ったのであるが、筆者の着眼する「不在の乳房」のテーマは、彼のグループ技法の中でどのような役割を演じているのであろうか。それを以下に見ていきたい。

Bionは10人前後のグループ・メンバーの中で、リーダー的なケア・テイカーの役割を負ってグループに参加するのだが、先の引用にも示したように、彼は積極的にはグループの方向性をリードしないし、何かの役割を果たそうともしないし、動こうともしない。そこにメンバーと同様にただ座り、誰かが話し出すのをじっと待っているというスタンスである。沈黙が起きれば、起こるに任せている。ここでメンバーは、何もしてくれないリーダーに対して、次第にフラストレーションを募らせていくという力動を手始めに起こしている。

これがBionのグループに対する初期操作と言えるもののように思われるが、これはいったい何を意味することになるのだろうか。ここでのポイントは、リーダーとしての期待を向けられているBionが、一見何もしない、ということにある。つまり、リーダーが眼前に控えているのに、リーダーレスの状態を作り上げようとしているのだ。換言すれば、リーダーがそこにいるのに、何も与えてくれない、世話してくれない、授乳してくれない、ということになる。これはまさに、「不在の乳房」状況なのだ。

Bionは、グループ療法の手始めの技法として、世話してくれないリーダーを提示しようとしている。これは、個人精神分析療法の基本原則である禁欲原則を踏襲したものと見ることもできよう。すなわち、それは、クライエントに満足を与えないことにより、神経症的問題を賦活させ、転移神経症を形成させることを狙いとしている。グループで言えば、それと同じように、グループ・メンバーはリーダーから満足感を与えられないことにより、逆に「全体としてのグループ」としての転移神経症を発展させることに導かれる。

Bionは、「グループ・ダイナミズム」において自らのグループ理論を洗練させていく中で、Klein理論をフルに活用し、グループは原光景状況に直面して、原初的不安を賦活させられるのだという理論展開を見せているが、筆者はもっ

とシンプルに、まずグループは世話を与えられないという「不在の乳房」状況に直面させられるのだ、と言い換えてもよいように思う。「不在」ということを契機に、グループ全体は原初的不安を刺激され、退行したひとつの人格のように、さまざまなうねりを見せるダイナミクスを醸成させていくのである。

ここからBionは、彼のグループ療法における基本的テーゼである、「ワーク・グループ」と「基底的想定」という概念を導き出すが、詳しい説明は解説書(祖父江、2004)に譲るとして、前者が個人における「自我機能」に相当し、後者が「精神病性不安」に呼応することだけは押さえておきたい。すなわち、Bionはグループ・ダイナミクスの中に二つのまったく異なる心性を発見した。グループは「不在の乳房」を契機に、精神病性の不安を賦活させるが、それをワーク・グループ機能によって、観察し思考し、グループの合理的な機能の中に統合・発達させていくことに、Bionはグループ療法の意義を見出そうとしたのである。

このようにBionは、グループ療法においても、自らの世界との断裂や隔絶を想起させるような原体験(乳房の喪失)にひそかに揺動されて、技法や理論を発展させていったようにも見える。そして、Bionの眼差しの先は、それにとどまらず、「不在の乳房」をさらに超え、その彼岸にまで見据えようとした形跡が窺えるのだ。それをさらに次項で述べたい。

2)「不在の乳房」の彼岸、「原始心的proto-mental」なマトリックス

『グループにおける経験』に見られるBionの思考や概念は、先ほど基本テーゼとしてあげた「ワーク・グループ」と「基底的想定」のみならず、オリジナリティと直観的発想に溢れている。基底的想定をさらに3つの種類「闘争－逃避」、「依存」、「ペアリング」に分類し、それぞれが支配的な集団を軍隊、教会、貴族社会に当てはめたり、さらには、原子の即時的で不可避的な結びつきに似た、基底的想定の無意識的で本能的な結合力を示すために、「原子価valency」という用語を物理学から借用したりしている。なかでも極めつけは、基底的想定のマトリックスmatrixとしての「原始心的組織proto-mental system」を想定したことであろう。

Bionは、基底的想定の根拠をどこに求めるかに腐心し、「体験を超越する概

念を用いなければ、私の見解を適切に表現することはできない」という思いに辿り着き、「原始心的組織」の着想を提唱するに至った。原始心的組織は、「三つの基底的想定の原型が存在」するマトリックスであり、「身体的、心理的、ないしは心的なものが未分化な組織」であり、「作動していない基底的想定は、原始心的組織の中に閉じ込められている」というのである。すなわちBionは、グループ状況における基底的想定という精神病性の不安の発生源を、心身未分化のプリミティブな生命段階にまで遡行し、そこにその根拠を求めたのである。

Meltzer,D.（1978）は、「原始心的レベル」での機能を提示したことが、『グループにおける経験』での最も重要な着想だったと言い切っている。そして、Meltzerは後の著作（1986）の中では、Bionがプリミティブで種族的なこころの深層を探求することによって、胎生期の段階、つまり心理学的というよりも神経生理学的な出生前の段階を考えようとしていると指摘している。福本(1995)も解説するように、このことはこころの原基となるもの、すなわち原始心的なmindlessの領野をも、Bionが視野に含み込み定式化しようとした試みとして意義を持つ。

他にも幾人もの研究者が、Bionにおける原始心的で本能的な構成要素への概念化に着目している。Miller,E.（1998）は、Bionのグループにおける理論化に、基底的想定や原子価や原始心的組織などの、きわめて本能的な概念を導入していることに注目しているし、Symington,J.&N.（1996）は、後のBionの思考に関する理論化のひとつ、「ベータ要素」が原始心的組織の置き換えではないかと指摘している。またTustin,F.（1981）も、Bionの後の「コンテイナー」概念が、生命のない対象に関する機能を具体化させたものではないかと推察し、前生命的な基盤へBionが目を向けようとした意義に触れている。

このように見てくると、グループ療法の定式化に当たって、Bionは原始心的なmindlessの領野にかなりの思いを込め、それを射程に入れようとしていることがわかるのではなかろうか。そして、その要となっている定式は、基底的想定のマトリックスは、原始心的組織に求められる、ということである。このことは、「不在の乳房」との関連で考えると、何を意味することになるのだろうか。

筆者の観点から見ると、これはBionが乳房前、すなわち誕生前の世界にまでこころの原基を探し求めたということを意味する。つまり、「不在の乳房」の申し子である基底的想定の母胎は、乳房との対象関係が生まれる前の世界、すなわち原始心的で心身未分化なマトリックスにある、というのである。確かに、Bionは、Symingtonの言うように、原始心的組織という概念をこれ以後使うことも発展させることもなかったが、ただいわゆる【精神分析第四期】と言われる自由な思索の時代になると、Bionは再び「胎児のこころ」や「こころの原型proto-mind」、「誕生前のこころ」など、盛んに誕生前の世界への思いを込めた言及が増えてくる(たとえばBion,W.R.1994)。Bionの中には、一貫して奥深く、原始心的な世界への憧憬、mindlessなものへの偏愛が感じられるのである。

こうしてBionは、精神病性不安(基底的想定)の起源に、乳房のまだ存在しない世界、誕生前の原始心的なマトリックスを見据えた。ここでマトリックスmatrixということばが、もともとラテン語では、子宮を意味するという事実は、とても興味深い。Bionは乳房との原始的対象関係をこころの出発点とするのではなく、その前の世界、子宮におけるこころの原型を考えようとしていた節が見られる。まさにビオンは、「不在の乳房」の淵や彼岸にまで、「ツノザメやサバのごとくの長距離知覚」(Bion,W.R.1994)を働かせようとしていたのである。

ここまでくると、Bionの視点が、精神分析、さらにはクライン派精神分析の領野を大きく越え出てしまうことに気づかれるだろう。だが、Bionはそうするわけにはいかなかった。なぜなら、幾人かの女性との苦い経験や、妻Bettyの死に対する罪悪感と見捨てられ感など、「不在の乳房」の辛酸をさんざん舐めさせられた果てに、ようやく巡り合ったKleinという新たなる乳房である。その乳房から、そう簡単に離乳するわけにはいかなかったのである。「グループにおける経験」が「人間関係誌」に連載され始めたのは、1948年。終わったのが1951年。まだ、Kleinとの個人分析は、真只中で続いていた。Bionは、したがって、首尾よくmindlessな子宮の領野から、Kleinの懐のもとに戻ってくる必要があった。それが次に述べる「グループ・ダイナミクス」における理論化に如実に窺える。Bionは、Klein乳房に歩み寄ったのである。

3)「体制乳房establishment breast」への接近

Bionは、家族に対する記載と同じように、Kleinに関しても多くを語っていない。Bionの2冊目の自伝（1985）が14章ある中で、わずか1つの章に断片的に記載されているだけである。しかも、その描写は乾いた筆致で書かれており、Kleinに向けた個人的感慨は直接表現されてはいない。ただ、Kleinは、Bionから見ると、「均整が取れた顔立ちで、威厳があり、どこかしら威圧的な女性」で、しかもBionが黄疸症状を出してセッションを休んだときも、平気で料金を取ったという。Bléandonu,G.（1994）によると、BionはKleinの女性的な才能に魅惑されるにつれ、Kleinが要求する党派的な忠誠心に、カタストロフィックな拒絶感を感じ始めたのではないか、とのことである。

BionにとってのKleinの存在意味を、Bion自身の言及も少ないこともあり、一概に決め付けるわけにはいかないが、筆者は後年Bionが『注意と解釈 Attention and Interpretation』（1970）の中で喩えた、既存の体制establishmentと神秘家mysticとの関係の中に見ると、わかりやすいのではないかと考える。すなわち、先に述べたように、Bionは原始心的組織などの独自の（あるいは神秘的な）着想を豊かに宿していたが、すでに時の精神分析の体制establishmentともなっていたKleinからみれば、自らの学説から外に出る者をよしとはしなかったことだろう。BionがSutherlandに語ったところによると、Kleinは、Bionのグループに関する仕事に関して、あからさまな敵意こそ向けなかったものの、快くは思っていなかったようだ、とのことである(Sutherland,J.D.1985)。精神分析家になり立てほやほやだった（1950年に資格取得）神秘家Bionにとって、Kleinは目の前に立ちはだかりも、魅了もしてくる大きな体制だったのではないか。Kleinからのそんな影響が、「グループにおける経験」と「グループ・ダイナミクス」との間の理論的変更に垣間見えるのである。

この変更は、大まかに言えば、Bionが自らの直観と観察力によって把握したグループ現象の生の素材を、Klein理論によってかなりすっきりと整理し、整合化させたことから成る、と言えるだろう。したがって、「グループ・ダイナミクス」は「グループにおける経験」の当を得た解説ともなっている。そのいくつかを拾ってみると、まずBionは、「グループにおける経験」では理論的に曖昧だっ

たグループ現象を、Kleinおはこの投影同一化理論によって整合性をもたせようとした。すなわち、メンバーがリーダーに向ける無意識的な期待、不安、欲動等は投影同一化によって非言語的にリーダーに伝えられるので、リーダーは強烈な感情体験に晒される。そして、リーダーの役目とは、グループ全体が投影してきているそれらの情緒や不安を自らの感情体験を手がかりに理解し解釈していくことである、と。この定式化によって、Bionは「不在の乳房」状況で生起するメンバーとリーダーの相互コミュニケーションの性質や、それを媒介している投影同一化を解釈していくというリーダーの役割を明確にした。特に、それまでは曖昧だったリーダーの技法面での手法をより分明にしたことは大きな意味を持つ。もっともここでBionは、実のところKleinの投影同一化理論を踏み越えている面もある。Bionがメンバーの投影同一化を理解し、解釈を行う基盤にしたのは、投影同一化の受け手である「分析家自身の情動的反応」である。リーダーは分析家として、自らの逆転移を認識することによって、メンバーの投影同一化の内容を知る手がかりにしようというのである。周知のようにKleinは、「逆転移の治療的利用」を唱えたHeimann,P.(1950)に対して、逆転移はすべて治療者側の病理の反映として理解すべきだと、強く反対した。したがって、BionはここでKlein理論から勇み足をしているわけだが、それにしても、投影同一化理論によるグループ内での無意識的なコミュニケーションの理解とその解釈という根拠をグループ療法に持たせた功績は大きかった。ちなみに、Bléandonu,G.(1994)が言うように、Bionはグループ内で投影同一化現象に出会っていた点で、この後精神分析サークル内で巻き起こる「逆転移の治療的利用」論争に10年先んじていたのである。

次にBionが企てた変更として、基底的想定の理論的根拠をどこに置くかという点に関してである。すでに論じたように、Bionは「グループ内での経験」においては、その根拠を原始心的組織、つまり心身未分化な誕生前のマトリックス(子宮)に求めようとした。だが、「グループ・ダイナミクス」においては、基底的想定は「原初的エディプス葛藤に関連した、精神病性の不安に由来する構成要素」と位置づけられた。つまり、Bionは、基底的想定を、誕生前の子宮世界から、誕生後の「不在の乳房」由来の精神病世界にその重心を移動させたのだ。こ

のあたりのことをMiller,E.（1998）も、Bionが基底的想定を本能的なものと見ようとしているのか、誕生後の経験に由来するものと見ようとしているのか、その腰の定まらなさを指摘しているところだが、筆者はここに体制乳房Kleinの影を見ないわけにはいかないように思う。Bionが、Kleinの「ブリリアントな生徒」(Bléandonu,G.1994）になるためには、Bionは子宮の世界から乳房との関係に舞い戻ってくる必要があったのだろうし、Meltzer,D.（1978）の言い回しに従えば、kleinの「精神分析トレーニングは、Bionにオプレッシブな影響を及ぼした」ということにもなる。

そのKleinの影響の極めつけは、基底的想定が支配的なグループ状況を、原光景に直面した部分対象レベルでのダイナミクスだと意味づけ、それはKleinが妄想分裂ポジション、抑うつポジションとして概念化した原始的防衛機制が優勢な精神病性の世界と同じなのだとすっきり整理したことだろう。ここでは、投影同一化やスプリッティング、妄想分裂ポジション、抑うつポジションなどのKleinの主要概念がふんだんに盛り込まれ、Klein色が非常に濃くなっているところである。

このように「グループにおける経験」から「グループ・ダイナミクス」における理論的変化の背後に、Kleinの影を見てきたが、その影響をさらに細かく読み解く上でなかなかに興味深いことをSanfuentes,M.(2003)が指摘しているので、最後に取り上げたい。Sanfuentesによると、「グループ・ダイナミクス」には、3版あるのだと言う。最初は、1952年にKleinの70歳の誕生日を記念して、国際精神分析雑誌が組んだ特集に捧げられたものであり、第2版は、1955年にKleinが編集した“New Directions in Psycho-Analysis”に掲載されたものであり、第3版は『グループにおける経験』に載せられたものである。このうち、第2版と第3版の間には、改訂は加えられていないので、まったく同じ内容だが、問題なのは、初版と第2版の間の変更だという。筆者がこれまで参照して論じてきたものは、改訂後の版のものだが、初版とは次のような違いがあると、Sanfuentesは指摘する。

まず基底的想定現象に関して言えば、改訂版では精神病機制の点から説明し直されていること。すなわち、初版まではBionは、先ほど挙げた「原始心的

組織」という自説を保持していたのだ。また、基底的想定の言語は、初版では象徴を欠いたコミュニケーションであると言っていたのから、2版では荒廃した言語と言い方を変えていること。フロイト理論に関しても、初版では、フロイトのグループ理論と、自分の理論は違うものだと言っていたのが、2版では、フロイト理論を補足するものだと言い、批判を弱めたこと。さらに、初版では投影同一化に単に言及していただけだったのから、2版ではクリニカルな道具としての位置づけをはっきりさせていること、等。細かいことではあるが、これらの変更の裏に、FreudやKleinに対するBionの気遣いや、BionがKleinにじわりじわりと歩み寄っていった密やかな足跡を読み取ったとしても、あながち穿った見方でもあるまい。Bion自身、初版の結語として、グループ研究の前進は、Klein理論の発展にかかっていると結び、最大限にKleinの顔を立てているのだから。

Ⅳ　終わりに

確かにLipgar,R.M.（2003）が言うように、「Bionの『グループにおける経験』は多くの質問が答えられないままだし、多くの経験が未踏査のままに残された」。だが、BionとKleinとの出会いの端緒に書かれたこの書は、Bléandonu,G.（1994）の言に従えば、まさに「女性的feminine世界と男性的masculine世界との遭遇」からくる実り豊かな成果でもあった。なぜならBionは、「不在の乳房」の過酷な体験から来る内的脆弱性を「筋肉防衛」によって塗り固め、強力な筋肉鎧を身に纏うまでになっていたのだが、Bionにとって直観力に満ち溢れたKleinとの出会いは、グループという仕事を通して、今一度自己の内面性へと歩を運ぶ好個の機会となったからである。

だが、Kleinとの関係には葛藤もあったことだろう。Bionは自らの個人史やグループ療法を通じて、「不在の乳房」の辺境の果てに、「原始心的マトリックス」という誕生前の子宮世界を垣間見たのではないかと思われるが、それはようやく遭遇した魅力的な乳房の前に、探求かなわぬ世界だったと思われる。Bionはともかくも、体制乳房のブリリアントな息子になる必要があったのだ。

次回には、このブリリアントな息子Bionが、体制乳房Kleinとの結合に進む

ことよって、精神病の精神分析という領野に、いかに次々と創造的な赤ん坊を産み落としていったかを見ていくことになろう。そこでは、いよいよその才能を開花させ、「不在の乳房」を認識論的な思考にまで止揚させていくBionの天才を目の当たりに目撃することだろう。

参考文献

Bion,W.R. (1952) : Group Dynamics: A re-view. International Journal of Psycho-Analysis33,235-247

Bion,W.R. (1955) : Group Dynamics: A re-view.In Klein,M.et al. (ed.) New Directions in Psycho-Analysis.Reprinted (1985) ,Karnac Books

Bion,W.R. (1961) : Experiences in Groups and Other Papers.Reprinted (1989) ,Routledge, 対馬忠訳 (1973)『グループ・アプローチ』サイマル出版会、池田数好訳 (1973)『集団精神療法の基礎』岩崎学術出版社

Bion,W.R. (1970) : Attention and Interpretation.Reprinted (1984) ,Karnac Books

Bion,W.R. (1982) : The Long Week-End 1897-1919:Part of a Life.Reprinted (1991) ,Karnac Books

Bion,W.R. (1985) : All My Sins Remembered : Another Part of a Life.The Other Side of Genius:Family Letters.Reprinted (1991) ,Karnac Books

Bion,W.R. (1994) : Clinical Seminars and Other Works.Karnac Books, 祖父江典人訳 (1998)『ビオンとの対話——そして、最後の四つの論文』金剛出版, 松木邦裕、祖父江典人訳 (2000)『ビオンの臨床セミナー』金剛出版

Bléandonu,G. (1994) : Wilfred Bion:His Life and Works 1897-1979.Free Association Books

福本修 (1995) :「メルツァーの発展」小此木啓吾、妙木浩之編『現代のエスプリ別冊 精神分析の現在』至文堂

Heimann,P. (1950) : On counter-transference. International Journal of Psycho-Analysis31,81-84

磯田雄二郎 (1991) :「ビオンと集団精神療法」精神分析研究35 (3)

Lipgar,R.M. (2003) : Re-discovering Bion's Experiences in Groups. In Lipgar,R.M. and Pines,M. (ed.) Building on Bion:Roots.Jessica Kingsley Publishers Ltd

Meltzer,D. (1978) : The Kleinian Development.Clunie Press

Meltzer,D. (1986) : Studies in Extended Metapsychology.Clunie Press

Miller,E. (1998) : Are basic assumptions instinctive? In Parthenope Bion Talamo, Franco Borgogno & Silvio A. Merciai (ed.) Bion's Legacy to Groups. Karnac Books

Pines,M. (1985) : Introduction.In Pines,M. (ed.) Bion and Group Psychotherapy. Published (2000) ,Jessica Kingsley Publishers Ltd

Pines,M. (2003) : Bion and Foulks on Empathy.In Lipgar,R.M. and Pines,M. (ed.) Building on Bion:Roots.Jessica Kingsley Publishers Ltd

Sanfuentes,M. (2003) : 'Group Dynamics:A Re-view'. In Lipgar,R.M. and Pines,M. (ed.) Building on Bion:Roots.Jessica Kingsley Publishers Ltd

祖父江典人 (2003) :「Wilfred R. Bion研究 (I) ――『不在の乳房』の原体験――」愛知県立大学社会福祉研究 5

祖父江典人 (2004) :「基底的想定」氏原寛他編『心理臨床大事典／改訂・増補版』培風館

Sutherland,J.D. (1985) : Bion revisted: group dynamics and group psychotherapy. In Pines,M. (ed.) Bion and Group Psychotherapy.Published (2000) ,Jessica Kingsley Publishers Ltd

Symington,J.& N. (1996) :The Clinical Thinking of Wilfred Bion.Routledge

Tustin,F. (1981) : Psychological Birth and Psychological Catastrophe.In Grotstein,J.S. (ed.) Do I Dare Disturb the Universe? -A memorial to Wilfred R. Bion.Caesura Press,平島奈津子訳 (1992)「心理的な誕生と心理的な破局」『イマーゴ特集　精神分析学の現在』